三島作品における〈妹〉

小林和子

一　はじめに

三島由紀夫の二歳違いの妹・美津子は、昭和二十年十月二十三日にチフスのため十七歳で亡くなっている。

美津子の死は、「仮面の告白」（S24・7）の中では次のように簡単に触れられているにすぎない。

妹が死んだ。私は自分が涙を流しうる人間であることを知って軽薄な安心を得た。

園子が或る男と見合をして婚約した。私の妹の死後、間もなく結婚した。

まさに「仮面の告白」（傍点筆者）の中でこそ、冷淡にさりげなく触れられているにすぎない妹の死も、実際には三島にとって衝撃的な出来事だったようである。

日本の敗戦は、私にとって、あんまり痛恨事ではなかった。それよりも数ケ月後、妹が急死した事件のほうが、よほど痛恨事である。

私は妹を愛していた。ふしぎなくらい愛していた。当時妹は聖心女子学院にいて、終戦後しばらくは、学校の授業も、勤労動員のつづきのやうで、疎開されていた図書館の本の運搬などを手つだわされたりしていたやうである。ある日妹は発熱し、（中略）腸出血のあげくに死んだ。死の数時間前、意識が全くないのに、「お兄ちゃま、どうもありがたう」とはっきり言ったのをきいて、私は号泣した。

戦後にもう一つ、私の個人的事件があった。

戦争中交際していた一女性と、許婚の間柄になるべきところを、私の逡巡から、彼女は間もなく他家の妻になった。

妹の死と、この女性の結婚と、二つの事件が、私の以後の文学的情熱を推進する力になったやうに思われる。（「終末感からの出発―昭和二十年の自画像」（S30・8）

敗戦が三島にとって本当に痛恨事でなかったかは問題であるが、それはともかくとして妹の死が痛恨事であったことは、「心ゆする思ひ出―『銀座復興』とメドラノ曲馬」（S28・3）の中でもほとんど同じように語られているし、また妹の死が実名を使って「朝顔」（S26・8）という小品として結実していることでも確かめられる

のである。

しかし、このような三島自身の告白にもかかわらず、従来三島における女性ということを問題にするにあたっては、三島の幼年期に決定的影響を与えたとみられる祖母や、「椅子」（S26・3）などにうかがわれる三島の遙かな憧れの対象としての母などに比べると、この妹の存在は、今まで見過ごされて来ているように思われる。(1)

美津子の死後の三島作品に色濃くあらわれる妹の影を追いながら、三島作品にみる妹の存在とその死の意味をここにもう一度確認してみたいと思う。

二

美津子の死が直接のモチーフとなっている作品は、先にあげた「朝顔」と「罪びと」（S23・7）の二作である。

妹の死の記述ではじまる「朝顔」は、妹の病気が治った夢を見て、その夢の中で妹をあとにして家を出た「私」が、車中で、さっきの妹は実は幽霊だったのではないかと思ったとたん、ふりかえった車の運転手も幽霊だった、という短篇である。

最後にオチをつけてはいるが、全体には三島らしい作為や理屈っぽさの無い、真摯な哀惜感の漂う佳品となっている。

特に、夢の中の別れ際に、妹が「いってらっしゃい」をくり返すシーンは印象的であり、この「いってらっしゃい」は、「雛の宿」（S28・4）の中の別れの場面を連想させる。

改札口での別れ際に、キヨ子は何と言ったと思ふ。

「いってらっしゃいませ」

さふ言ったのだ。そしてあの黒い焔のやうな瞳で僕をじっと見て、手を握った。

「雛の宿」の「僕」は、雛祭りの日、街でみかけた女学生を、「おや、死んだ妹だ」と思い、人違いと知りつつそのキヨ子という女学生の家までついてゆく。そして、その夜二人は結ばれるが、その後半年ぶりに、「あの母子のきちがいの家かね」という近所の噂を耳にしつつその家を訪ねてみると、あの日と全く同様に雛壇を前に母と娘が坐っているのが見えたという一篇である。

この「いってらっしゃいませ」は、この作品の中では、男雛の帰りを待つ女雛を象徴させているのであろうが、「朝顔」の夢の中で兄の帰りを待つ妹の姿とも重なってきているのではなかろうか。雛祭り自体幼い頃の妹の思い出とも結びついているのであろうし、「つくづく見ると、少女はそれほど妹に似ていはしなかった」としても、初めに妹の面影を見た所の少女の後を追い、家にまでついてゆき、そして一夜を共にするというのは、それが夢の中の出来事のように書かれていればいるほど、単なる妹への追慕とだけはいいきれないもっと切実なものを、そこに感じてしまうのである。

一方、「罪びと」は、チフスで死んだ婚約者郁子の七・七忌の日に、彼女がチフスにかかったのは自分のせいだと語る則子に対して、生前に二人で犯した罪に全く触れない彼女に怒りを感じながら自らの罪深さを思う護が描かれ、しかし彼も結局は「物ほしそうな甘い悔恨の返事を則子に書いた」という話である。

ここではチフスで死んだのは妹ではなく、婚約者の設定になっているが、この郁子、護、則子の三人に、錯綜する形で、三島、妹、周子のモデルになった女性の影が見られるような気もする。

美津子の死は、一章でみた「仮面の告白」や「結末感からの出発」

で書かれているように、その女性との離別とも密接に結びついた事件だったことは、この作品などからもうかがえる。

また、残された者のエゴイスティックな心理をシビィアに描いてゆく作者の視線も見逃せないであろう。

三

この三作品の他にも、直接美津子をモデルにしたわけではないが、主に兄妹愛を描いた作品がいくつかある。次にそれをみてゆきたい。

その第一は、「家族合わせ」（S23・4）である。

二つ違いの妹・輝子[2]を持つ兄・主税は、幼い頃に女中のいたずらで妹と抱き合った思い出と、書生との姦通が露見して自殺した母の思い出を背負いながら、未成熟な肉体の男として成長し、父の死後凋落した生活を送っているが、階下で毎夜妹が肉体を売っているらしい物音に苦しみ、ついに自らの恥を妹に告白し、二人は一つ布団に入り、侵入してきた男によって殺されるのを待つという話である。

この作品は、翌年に発表された「仮面の告白」の原型ではないかと想像される。

その第二は、「水音」（S29・11）という作品で、兄・正一郎と死病に犯された妹・喜久子は、母を苦しみの末死なせた父を憎んでおり、ついには毒殺するが、その盥を洗う水音から殺人が露見し、兄は一人で罪をかぶり、妹は「これで私も安心して　死ねるわ」と呟きながら施療院へ行くという話である。

その第三は、この「水音」のモチーフをそのまま受け継いだと思われる戯曲「熱帯樹」（S35・1）である。

兄の勇は不治の病で床につく妹の郁子[3]を愛しており、郁子は母を憎み、兄を使って殺そうとするが、兄は結局果たせない。

二人はついに海に向って死出の旅に出て、残された夫婦は、家庭内にはびこる憎悪の象徴である熱帯樹を再び庭に植えようと話す。

この作品に関しては、三島自身が、「『熱帯樹』の成り立ち」（S35・1）の中で、「近ごろフランスの地方のシャトウで実際に起った話」をヒントにしたもので、「アイスキュロスの『オレスティア』三部作」と「千夜一夜譚の第十一夜と第十二夜」の影響をあげている。

しかし、妹を愛する兄と、不治の病に犯された妹とが、父と母の違いはあるにしろ親を殺そうとする内容は「水音」と全く同じであり、「家族合わせ」にもその崩芽が見られる所からすれば、フランスで実際起きた事件は単なるきっかけに過ぎず、このようなモチーフへの作者の強い関心が下地になっていると考えられる。

ギリシャ悲劇の影響にしても、親の不義とそれへの子の復襲というモチーフは「オレスティア」に仮りたものであろうが、エレクトフとオレステスは姉弟であり、「家族合わせ」や「熱帯樹」では兄妹が共に死ぬという設定からすれば、墓穴に作った自らの隠家の中で共に焼け死んだ兄妹を描いた「千夜一夜物語」の影響の方が大きいかもしれない。

ただ、禁忌であるところの近親相姦的な兄妹愛が最終的に情死の形をとるのは必然的であるともいえるが、そのような兄妹愛の終局を執拗なほどに繰り返すのは、作者自身に内在する問題に還元されてゆくものであろう。

また、このような兄妹愛を扱ったものとして、この三作品の他にも、「幸福号出帆」（S30・6）という長篇があることも忘れてはならない。

混血青年の異父兄・敏夫と妹の三津子（三島の妹・美津子と同名であることは見逃せない）は仲の良い兄妹で、母・正代の昔の恋仇である歌子にイタリア人の亡夫の遺産が入ったのを機に、親子三人は歌子の家に入りこむ。

歌子はオペラ「椿姫」を企画し、いったん主役は三津子に決まるが歌子の妨害に夢破れ敏夫の関る密輸団に三津子も加わり、警察の手入れを危うく逃れた兄妹は、歌子の遺産を着服して手に入れた機帆船〈幸福号〉に乗って出帆し、残された母と歌子は敏夫が実は歌子の子であったことを語り合う。

ここでは最後に、実は敏夫と三津子は兄妹ではなかったという結末を迎え、また二人は情死するのではなく、〈幸福号〉に乗っていずこかへ旅立つという所が、先の三作品とは決定的に違っているかにみえるが、しかし、この作品も、兄妹愛を扱った作品であることは次のような箇所から明らかなのである。

それは最後に、歌子と母正代が語り合う場面で、「敏夫は妹思ひ、妹は兄思ひで、ほとんど一心同体でした」と正代が述べたのに対して、歌子が「もし二人が、お互いに男と女として愛し合ってよいことに気がついたら、それで幸福になったとも限りませんもの。兄妹愛、美しい清らかな愛、永久に終りのない愛」と答えている所なのである。

二人は結局、兄と妹として幸福号で二人だけの世界へ旅立ったわけなのである。

つまり、禁忌である以上死を避けられないところの近親愛のモチーフを、こういう形で明るい方向へ転換させただけで、兄妹愛に至上のものを見ようとする点には変りが無いとも言えるだろう。

また、このような兄妹愛の同音異曲を奏でるものに「翼」（S26・5）という小品がある。

従兄妹の杉男と葉子は祖母の家でのデートを楽しみにしている。二人は混んだ電車の中でお互いの背中に翼を感じ、杉男は葉子の翼を見たいと願うが、葉子は空襲で死に、杉男は、重い翼を肩に感じながら、戦後の日常を生きている。

「二人はいろんな点がよく似ていたので、本当の兄妹とまちがへられることがたびたびあった」という杉男と葉子の恋物語に、兄妹愛の変奏曲を聞くのも無理ではなかろう。

作者が自作解説の中で「私は実はこの種の短篇で、むしろあらわな告白をしていたつもりであるが、当時この告白に気づいた人はいなかった」（「新潮文庫解説」S45・7）と述べている言葉をそのまま信じるなら、戦後の忌むべき現実の中にとり残された兄、三島の、ひとり飛び立っていった妹、美津子への切ない追慕の情をそこに読みとることも、もしかすると許されるのかもしれない。

四

このような兄妹愛を描いた作品以外にも、妹の存在にスポットを当てた作品として「ラウンド・スピーカー」（S22・12）と戯曲「燈台」（S24・5）がある。前者は、戦後社会を舞台に、人のよい没落貴族の青年が友人達に、ラウンド・スピーカーの代金と偽われて、無理をして作ったお金をまんまと騙しとられるという話で、そ

の中に、「ぼんやり家の中に坐っていても何でも知っている魔法使いみたいな存在」として妹・渥子が登場してくる。つまり、兄の貴族的な誇り故の嘘を無言で理解する妹が登場してくるのである。

一方、後者では、戦争帰りの昇は父の新しい妻であるいさ子に憧れており、彼女も自分を奪い取ってほしいと内心願っているが、兄の気持ちに気づいている妹の正子は、父の前でその事を言い出そうとする兄を必死で止める。そして結局何事も起らず終り、「まるであたし、あの燈台みたいだわ。あたしだけが明るくなっていなければならないの。……あたしのおかげでみんな航路を迷はないでいられるの。」と呟く妹・正子の独白で終っている。つまり、戦後の混乱した家族関係の中で懸命に、その崩壊から救おうとする妹の姿を描いているのである。

ここでも、戦後の家族生活の中で、妹を失ったことの、作者自身の喪失感の大きさを読みとることも不可能ではないかもしれない。

この他、「美しい星」（S37・1）などをみても、三島作品においては、姉弟や兄弟の設定はほとんど無く、兄妹の設定が圧倒的である事実も付け加えておきたい。

五

以上、三島作品において妹やそれに従する存在が登場する作品を具体的に見てきたが、一見すると兄妹愛とは何の関係も無いように見えるところの、三島の本格的文壇デビュー作「盗賊」のような作品の中にも、三島における〈妹〉という問題を考えさせる要素が潜在しているのではないかと思うのである。

「盗賊」は昭和二十年一月から起筆され、昭和二十三年十一月に、三年の歳月をかけて完成された三島の初の長篇小説であり、野心作であった。

一般に失敗作と評価されている作品ではあるが、三島自身は、ラディゲの向こうを張った作品で、「仏蘭西心理小説と独逸浪曼派小説との奇妙な混淆」（「三島由紀夫作品集・あとがき」S28・7）と述べている。

昭和十年代の華族社会を舞台に、美子に捨てられて自殺を決意した明秀と、同じく佐伯との失恋が原因で自殺を決意した清子は、それぞれに恋人の幻影を抱きながら結婚し、式の当夜心中する。そして、美子と佐伯は自分達の若さや美貌がすっかり誰かに盗みとられてしまっていることに気づくという話である。

この作品に限ったことではないが、この作品においても三島自身が夥しい解説を残しているが、それを忠実に信じるなら、この作品の意図は、優雅な華族社会のロマンティックな物語の中に、作者自身の「戦争と乱世の心理」（「『盗賊』ノート」S30・7）を描くことであり、そこに〈悲劇への意志〉といったものを読みとるのが一般的なのではないかと思う。

しかし私は、この「盗賊」という作品論を試みようとしているわけではない。

ただ、別々に心に思う人がありながら、偶然から心中したように設定されている明秀と清子との関係を、もう一度考え直してみたいのである。

三章の出会いの場面で、明秀と清子が車の中で初めて二人っきりで並んだ時、二人は「幼い兄妹のようであった」と表現される。

また、明秀は、駅で出会った母の友人に清子のことを「お妹御さ

ん?」と尋ねられ、一方明秀も、清子の母に「亡くなりました宗良に、あなた本当によく似ておいでになりますこと」と言われる。

明秀は清子のことを、「妹のやうに愛した」とも述べ、「二人はお互いのなかにお互が在る」(傍点作者)と感じ、さらに「一双の鏡が相対しているやうに」感じるのである。

人から「兄妹のやうに似ている」と見られる二人の関係は、失恋から自殺を決意する二人の心的類似性を導き出す伏線としてだけではなく、お互いが真の恋人の代償として偶然選んだところの心中相手というだけのものではない深い関係を匂わせているのではなかろうか。

特に、「清子と明秀を乗せた船」が「幸福な初恋人」として死出の旅に出たと表現される時、この作品にも一連の兄妹愛のテーマの変奏曲を聞くことができるような気がするのである。

作者の、「一九四五年・戦争がをはる。その年の十月に妹が死ぬ。私は満二十歳、東大法学部の学生である。そのころの私の生活体験から、この小説の構想が生じた」という説明に触れると、多分ここにはかかれていない所の作者自身の失恋事件を、美子と明秀の関係にみるのが一般的なのであろうが、「その年の十月に妹が死ぬ」という一文をも見過ごせないように感じるのである。

妹の死後二ケ月後に起筆されたこの作品の奥底には、複雑に屈折した形での亡き妹への挽歌が囁かれているのではなかろうか。

この一風変った心中物も、後に次々に展開されてくる兄妹の心中物語と同様に、妹の死という事実にその原点を求めることはできるような気がするのである。

六

以上みてきたように、三島作品における妹の存在は、存外大きくて、それは時に兄を救い守る母のような存在であったり、時には比類無き兄の理解者であったり、時には親殺しの共犯者であったり、また時には至上の愛を共有する不倫の恋人であったり、様々に形を変えながらも、それはたびたび登場し、そしてそれぞれの作品がお互いに相関しつつ、執拗に繰り返されているのである。

そして、それらの中心はやはり兄妹愛という問題であるに違いない。

それでは兄妹愛とはそも何なのであろうか。

それは、性倒錯、禁忌としての愛としては三島の主要テーマであるホモ・セクシュアルと同様に捉えられるであろうが、それ自体の特質は、「相似といふものは一種甘美なものだ。ただ似ているといふだけでその相似たもののあひだには、無言の諒解や、口に出さなくても通ふ思ひや静かな信頼が存在している」(「翼」)という事に尽きるのではなかろうか。

そう考えてゆくと、兄妹愛という問題は、三島におけるナルシシズムの問題に還元されてゆくものなのかもしれない。

しかし、私は三島由紀夫が妹・美津子に対して近親相姦的な愛情を持っていたと言おうとしているわけでは決してない。実際には、「熱帯樹」などの作品における近親相姦的な兄妹愛は、「仮面の告白」や「禁色」におけるホモ・セクシュアルと同様に、作家自身の性向の事実の如何にはかかわらず、作品のモチーフとして方法的に扱われたものだと考えるのである。

ただこのように執拗なまでに繰り返される兄妹愛の変奏曲や、亡き妹への挽歌を聴いてくると、そこにはやはり妹コンプレックスと称する他ないような妹への特別の思いがあったのではないかと思えてくるのである。

しかし、蛇足ながら、最後に再び付け加えさせてもらうなら、そのような妹への特別な感情というものも、三島の場合は、妹への思いが下地にあってギリシャ悲劇や千夜一夜物語のエピソードに関心がいったというよりも、千夜一夜物語を読み耽るような幼時期の三島独特の虚構世界が先に出来上っていて、実際の妹への関心は後から、つまり祖母と離れて父母妹弟の住む家に移った思春期になってから、彼自身によって意識的に作られていったものなのではないかという感じも漠然とするのである。

七

今まで三島由紀夫という作家を捉えようとする時に、従来見逃されて来た所の妹というものの存在を、具体的な作品の中で追ってゆくことによって、三島作品における妹の存在とその死の意味を考えてみた。

しかし、そのような妹の存在が、三島の晩年の作品、例えば「豊饒の海」のジン・ジャン姫のようなヒロインにどのように投影されて来ているのかについては、今後考えを進めていきたいと思っている。

(1) 北垣隆一氏が「三島由紀夫の精神分析」(S57)の中で、三島にへ妹コンプレックスへを指摘し、「朝顔」「雛の宿」「鍵のかかる部屋」「家族合わせ」を具体的にあげているが、「鍵のかかる部屋」は兄妹愛として捉えるより幼女願望・ロリータ コンプレックスと捉える方が妥当なのではないかと考える。

(2) 三島と美津子も一つ違いである。

(3) 「罪びと」のチフスで死ぬヒロインと同名。この他、あとで触れるが、「幸福号出帆」の三津子が、三島の妹・美津子と同名であるし、「雛の宿」のキヨ子も「盗賊」の清子と同名である。ヒロイン達の名前の相関も興味深い問題である。

(茨城女子短大非常勤講師)